

本年度の応募数は一般の部が36編、ジュニアの部は小

学生が2編、中学生が93編の合わせて95編であった。一般の部は前年度、前々年度より少し減ったが、ジュニアの部は大幅減となった。今年度は高校生からの応募が無かったのが残念。

審査員3名による合議で審査し作品に順位をつけたが、選定された各作品の評については審査員ごとの選評に譲り、ここでは詩作において気をつけたいことを記したい。

一般の部を通して見られる傾向として、随筆であれば作品化できるかもしれないが、詩という凝縮された表現形態を採る分野にあっては散漫ともとれる書き方が多くあつた。詩を書くうえで真に必要な、残すべき表現と吟味しているのか、という視点を持ちたい。

次に文章表現であるが、一瞥して自己満足が先に来て、読み手が後手に回らねばならないような、陶酔型ともいえるべき書きぶりも目立った。作者の知見や技巧を作品中に置くのは勿論かまわないが、読者を置き去りにするような表現となっていないか気をつけたい。

また、昨今の新型コロナウィルスの感染拡大による生活様式の変化に伴った影響なのか、扱うテーマが暗い作品が多くみられたのも今回の特徴であった。明るく書かなければならない道理はないが、暗く重い主題は「死」や「病」に焦点をあてがちで、これは古来より詩人はもとより多くの文学者が扱ってきたがゆえに、いまあらためて扱う場合には皮相的な表現は回避し、現代ならではの視点が欲しくなる。

これと対照的に、日常のひとコマを素朴に明るく表現した作品もあったが、ありきたりなモチーフをきらりと輝かせる手間は丁寧にかけた。それができると、詩的な日常がもたらされ、自然と作品が生み出されてゆくだろう。

ジュニアの部は、小学生が2編、高校生が応募なしという状況であるので、中学生の作品について述べたい。例年のことではあるが、テーマが「海」「空」「太陽」「雲」「ひまわり」「わたあめ」といった夏を想起させる作品が多く、これは応募締切の近まった頃に筆を執ることが多いからであろう。これらのテーマを直喩の多い表現で書き進めると、どうしても深さというものが出ない。作者ならではの角度から切り取ったものがあればと期待する。

今や世の中に根付いたSNSで若い人々の感性やこぼれを垣間見ることがあるが、そこには詩的な感覚がおおげさではなく溢れている。この感覚・感性というものが、詩という形をとつたならば、感銘を受ける作品が多く世に出るだろう。詩を広め、詩に親しめる環境づくりを我々ももつとしていかねばと思わされる。

厳しいことを書いたように思われるかもしれないが、こうしたことに気をつけてもらえば、作品はぐんと良くなる。そういうふうにつけて頂きたく縷々述べたこと寛恕を請いたい。